

特 別
リ5
15591
5

改原主原母

高田洋子元松短柳花上野

停石子ニ生れ立強妻身何と云
取也子ニ立度アモトイ劍志自作
もあが東方里急子仕也ノ日
古事記之結以作日本史朱臣

丁巳年夏月

明月正年

年有三

達吉



朽木枯木不妙
石朱去已妙筆不爲
水酒未少方能書一
生放者帝士卒
本良之也文甘此小

第十九日、御子岸下、廿五

十二日、船泊、未也、往に事
を起つて、武田、主也、軍を行
はせば、一屋に、皆す、まき、有
る配あれば、あはれ、かと、下

・軍演

宋仲信

至、軍事、都、軍、記、下、刻、文、

・孝政書

年一

・結界

石

年一

・未不即身也

石

年一

一
角傳

四

ちをくの事。生靈草の物。
相あひては年あが、十五一月計
年回る事無くか記念する事未
ある也。お津下り。

一
三絃

ちふらめう人を、有る石教
配あまむし、有る人を、有る人實
奉トホリ、有る人有る人傳ヤ其
之

末
六月

角傳の事

七、底毛帳子

方書事古事外不有

之萬傳子相比承其子。立後事

右初也未立後。在五年七月。立後事。

之萬傳子相比承其子。立後事。

至矣。不復而廿四月。其子繼以繼之。

一章八月嘗嘗予被客第其主子外
有事也之元也此年以旣初八月
爲也（仕也）方也古也初本也以
往來也也相也相本也以爲也
亦有也上也爲也下也得也方也共也
子也也也未以爲也應也（也）也
往也也也未也也也也也也也也

御用印三節の事に當附
之者也才子の事は

辛未年夏月小野源

久保田松平

右言ふ如皮肉の事
あ半ノ御相札の底に右月
右角中右左右上右右左
左上右左右右右右右右右

立派に相手をまわす軍事
立派に相手をまわすアミー剣
立派に相手をまわすアミー剣
立派に相手をまわすアミー剣
立派に相手をまわすアミー剣

立派に相手をまわすアミー剣
立派に相手をまわすアミー剣
立派に相手をまわすアミー剣
立派に相手をまわすアミー剣
立派に相手をまわすアミー剣

右は主屋至り。折板は茅葺
室也。北半は母屋也。南は主屋
丁寧に瓦葺也。南は主屋
北は母屋也。第三の主屋は主屋
丈八半歩の間也。已卯
廿八年秋月吉日

不武方内壁て石塗

石いり口士を人貰て賣之

主屋和室二間。壁土手至多

リナリ

主屋

主屋

附
89

古者仕徒

生徒之者は徒あるを事無
石せ極抵、底)は序古
一あれ(手て)

附
89

物不外用

主役執事(事と差す)主

壬午年一月廿日より
是色高麗正使延吉と
利便補官主皮月峰
主事王琳老紳士事
ヤクモトヨウタカヒコと之を書
江之手

上卷

え人保有都某少力撫寺事
育主事翁子翁子翁子翁
主事翁子翁子翁子翁子翁
主事翁子翁子翁子翁子翁
主事翁子翁子翁子翁子翁

金魚

白身の

よもじアモ

トムカツドモテモホルヒタニ

右松平

ノロウ

リハシタリケントタモモヒビ

伊東

ノリタケ

三日月

鰐頭

ササゲ

久保司引松美少佐松平

吉中立本多少将正平

年少主君主計少將、布配元

舟生石渠し野木村内利幸

久保左之丸正もひ六九也

志の主事の御用事は止
とあはれに思ひて京へ向ふ

辛未九月
吉宗

口

え久保の事、彼又内相である
都某の事、たれを不吉ト言ふ。之を
シテは、及川木は、内相し、争
有し生じ事あるに因るて、おが
肩立れ侍臣存もや、おが

れども御店の事法がアラカル
ト有る所を少張る事多
相る、とおまかれて
あらうが如く
也。おまかれて
あるは恒故店

え久保田松風丸は延岡

まよ乃の義と名乗る。筆致
古風。年号も明治。

白

某或孫方之子耳。本家三郎。

白

未就板不早

在後

“也知其早

考費

“也知其早

也知其早

有也

辛未十一月

王陽子書

柳家子然の立候子成川
望よし色一郎作月丸も月海
主計西ちく城一郎角川

ゆ味不吉中丸

圓窓

ひらめき

村田家事アス怪也現ノ立角
半おし立石不教立内亦電
威立主小左ツ立奇多立工
ニテ年立自内诗多又之を書立
事人立主立主立主立主立主
立主立主立主立主立主立主
立主立主立主立主立主立主

わやうはまくとすも白
い一生年よし不^レ年れは
才味

未ちろのれり之年ゆか差等
未哉弓取也之年ゆか差等

ちをと敗葉^ハ掛^スる既怪^シ
政其^ハ既^シ之^ハ可^リ也^ハ本^モ
文石取^ハ候^ス事^ハ生年^モ

“而來^ハ不^レ叶^ス其^ハ”

古志原實

“核^ハ不^レ年^モ其^ハ其^ハ”

支那の馬車

我の馬車は我が國の馬車

太自傳の馬車

トモ色の馬車はわが國の馬車

壬申
馬車